

私が会頭に就任してから間もなくあるお店の女主人から毎月『書』が来るようになりました。最初はドキリとして読みました。手紙は便箋 3 枚ほどで、中々の名文名筆でありました。何度か読み返して最初は恋文かと思える文脈でもありますが、思わせぶりを残しながらするりと上手に抜けていく様な見事な手法であります。

それは男のプライドと自惚れを上手にくすぐりながら、読む人に警戒感を持たせず、文中に引き込んでくれるうまさを持って居ります。

私も昭和 40 年富士食品を創業し、県下の学校給食の納入を始めました。ちょうどその頃、冷凍食品が現れ、この保存、解凍、調理方法が未知の時代であり、創業時は手不足で営業活動が出来ませんでしたので、仕事が終わってからは夜『富士食品ニュース』を書き、これをコピーして配達途中、学校のポストへ投げ込んで営業活動の不足を補っておりました。

昭和 50 年代は更に、朝は電話 10 本、はがき 5 枚、旅先からは 30 枚の便りを書きました。

1 番多かったのはロータリーのガバナーと言う役で、アメリカ研修の折は二晩徹夜で 440 枚宛名も分も手書きで、眠気は水シャワーを浴びて頑張りました。年齢 70 歳でした。先日この女主人にお会いして F A X 通信に書かせていただく了解を頂きました。

「27 年前店を始めましたが、中々お客さん来てくれないので手紙を書くようになりました。今 1 日平均 7 通書いております。」と言う。単純に数えれば 1 ヶ月 200 通、年間 2400 通となります。季節に合わせた切手、封はかわいいシールを何枚も使い、白い 2 重封筒の筆字の宛名書きはまだ見ぬ中身を想像させる見事な筆字であります。

この手紙を書くために、書道教室へ 3 年間通ったと言う執念もまた凄いものです。

私の努力なんかとてもとても及ばない方であります。

「季節 季節 庭に咲く花 通り抜けていく風の音 時雨れるまちの灯 傘を叩く雨の音 喜び 悲しみ 辛かったこと ふれあい 暖かさ 華やかさ 幸せのすぐ裏側にある不幸せ こたつのぬくもり 湯上りのビールとうまさ ほろにがさ・・・」さり気なくこともなげに過ぎて行く日々を語ってくれる便りは多くの男共を慰め、励まし、自信を与えてくれるだろうと思っております。私は周囲の人達にメールは止めて下さい!と言います。「安いから、簡潔で面倒くさくないから!」と声が帰ってきます。人間は肉声で話す事が大切なのです。私の友人は印刷した年賀状は見ないと言い、高倉健さんは手書き以外の出演依頼はすべてお断りしていませんと言われております。私達の様な小さな商工業者はこうした感性、情緒感が大切だと思います。

私も F A X 通信 250 号を超えさせて頂きました。この女主人に負けぬよう、一層努力いたして参ります。

人は足を運び、会う事による人脈が大切なように、音信(たより)を大切にすることも欠かせないもの様です。これからは益々少子高齢化が進みます。この地域で共に生きる仲介役は私共地元の小さな商工業者であります。この女主人を師として見習いたいと考え、紹介させて頂きました。